

学校風土の向上に向けたポジティブ行動支援(PBS)の実践

学籍番号 249215
氏 名 西田 淳一
主指導教員 庭山 和貴
副指導教員 牧 郁子

1. 背景と目的

近年、長期欠席児童生徒数および不登校児童生徒数の増加が著しい。文部科学省(2024)によると、小学校・中学校での不登校児童生徒数は353,970人で、全児童生徒の約3.9%にあたる。不登校児童生徒ならびに保護者と、教師では不登校の要因の捉え方が大きく異なるものがある。例えば公益財団法人子どもの発達科学研究所・浜松医科大学子どものこころ発達研究センター(2024)の調査では、不登校の「きっかけ要因」を「いじめ被害」「教職員への反抗・反発」「教職員とのトラブル、叱責等」と回答する児童生徒・保護者の割合は、教師に比べて明らかに高かった。このように、教員が感じている以上に、児童生徒同士の人間関係、児童と教員との人間関係、安心して過せる環境などの学校風土が不登校と関係していると考えられる。さらに、文部科学省(2023)も、学校の風土と欠席日数の関連を示す研究データがあることを示している。

学校風土の改善のための教育的アプローチの一つとして、「学校規模ポジティブ行動支援(School-Wide Positive Behavior Support、以下SWPBS)」がある。本実践の研究目的は、「PBSを様々な取り組みの中で導入することが学校風土や学校肯定感の向上につながるのか」、また「小学校の中でPBSをどのように実践することができるのか」という観点をもって、PBSの実践とそれに関連する効果について検証することである。

2. 理科の授業における PBS

報告者は授業研究と生徒指導を一体化させながら児童が学習できるようにするために、事例校における授業スタンダードに着目し、PBSに取り組むことにした。まず、授業スタンダードを、児童が行動しやすくわかりやすい言葉にすることで学習の際の望ましい行動を明確化した。望ましい行動を引き出すために、その行動の意義を説明したり、話し合う機会を設けたりした。また、お手本動画を作成して視聴させたりもした。望ましい行動に対するフィードバックの中では、学校既存の単元振り返りシートを活用したり、達成率をグラフ化したりした。学級全体の8割以上の児童が目標行動を達成できた時には、達成したことを可視化する仕組みを作った。

さらに、教員が児童の望ましい行動などを賞賛する「Good Behavior Card」、お手本となる児童のノートを掲示する「Good Note」、児童が互いの行動を賞賛し合う取り組みとして松山・三田地(2020)のPositive Peer Reportingの取り組みを参考に、「Nice & Thank youカード」にも取り組んだ。

3. 委員会における PBS

全校児童に廊下を歩くという行動を促すために「廊下を歩こうロボット」の作製、「廊下を歩こうキャンペーン」の実施をした。また、「靴箱に靴をきれいに入れようキャンペーン」も実施した。いずれもPBSに基づく取り組みとして実施した。まずは全校児童に働きかける目標行動を明確化し、その行動を引き出すために、呼びかけやお手本動画の作成を行った。目標行動を達成すると、ポジティブなメッセージを送ったり、シールを貼って掲示したりするなどのシステムをとり入れた。

4. 校内教育支援センターを利用する児童への PBS

不登校傾向のある児童3名に対する支援としてPBSを導入することにした。まず、報告者がそれぞれの児童の思いに寄り添いながら一緒に目標行動を設定した。その目標行動を支援するために、目標行動を児童のファイルやプリント、カードに書くなどして視覚化した。そしてフィードバックの仕組みとして、目標行動を達成するたびにポイントがたまっていったり、シールを貼って掲示したりするなどのシステムをとり入れた。

5. 学校全体に関わる PBS

1～5年生が、卒業を控える6年生に対して、6年生の素敵なおところや感謝の気持ちを伝える言葉を書いて掲示する「ありがとうの木」の取り組みを行った。桜の花びら型のカードに6年生へのメッセージを書き、それを桜の木の掲示に貼り付けていくものである。「6年生が望ましい行動をとる」ということと「5年生の素敵なおところを見つけた1～5年生がそれをモデルとする行動をとる」ということの2つの目標行動を設定しPBSに取り組んだ。その他、漢字チャレンジ月間という既存の取り組みの中にPBSを導入して取り組みの充実を図ったりもした。

6. 成果と今後の課題

理科の授業でPBSを行った1学年の児童を対象に、学校肯定感尺度と学校風土尺度を用いてアンケート調査を行ったが、いずれも実践前後で有意な差は見られなかった。しかし、学校肯定感においては得点が2点未満だった児童の人数は5人から2人へと減少し、学校風土においては得点が2点未満だった2人がいずれも11月には2点を上回るという結果につながった。

2年間の研究を進める中で、PBSに基づく取り組みをたくさん行うことができた。事例校は学校でPBSに取り組むということを掲げているわけではない。しかし、取り組みに賛同し一緒に取り組んでくれる教員もたくさんいた。SWPBSを行う土台ができてきたと感じている。今後もPBSの取り組みを継続させ、数年後には既存の校務分掌の中にPBSを推進する役割を作ろうという機運が高まることを目指していきたい。そして学校風土のより一層の向上につなげていきたい。